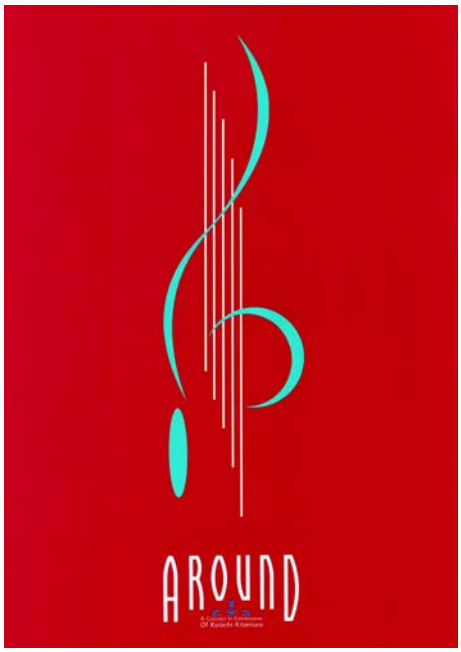
A Concert in Celebration Of Kyoichi Kitamura AROUND

【1991 年（平成 3 年）9 月 6 日】 東京芸術劇場大ホール



北村協一プロフィール

1931	大阪に生まれる
1954	関西学院大学経済学部卒業。在学中はグリークラブの指揮者として活躍。卒業後、東京コラリアーズ入団
1961	藤原歌劇団入団
1963	藤原歌劇団によるプッチーニ「外套」を指揮
1965	藤原歌劇団退団
1968	二期会合唱団常任指揮者となる
1970	二期会指揮者となる
1973	第 6 回文化庁芸術家海外派遣研究生として渡欧

故森正、今村征男の各氏に師事。
国立オペラ研修所講師、東京室内歌劇場、二期会合唱団指揮者

盟友・名優・北村協一

多田 武彦

昭和29年１月24日、関学グリーの第22回リサイタルで、北村協一は学生指揮者として組曲「月光とピエロ」を演奏した。京大を出て銀行員一年生になった私が初めて聴いた北村芸術であった。関学グリーの伝統美の上に、彼の、けれん味のない、オーソドックスな解釈が加わって、この名曲の模範演奏がおこなわれたような印象を受けたことを、今でもよく覚えている。

この正統性と堅確性は、40年近く経った今も、彼の音楽性の中枢部分に生き続けている。そしてこの年月の間に、彼自身の研鑽によって、幅広い芸術性へと高められていった。

私の組曲を、北村氏が指揮すると、安心して聴ける、という人が多い。その理由の一つとして、私が選ぶ詩がどちらかというと古典的で格調の高いものが多いが、これを北村氏が正統的に受けとめて音楽を構築していく点が挙げられる。それともう一つ、彼も私も、子供の頃から歌舞伎をよく観ていて、日本の歌曲に、この歌舞伎の「間」を巧みに加味しながら、空間と時間を支配していく点であろう。彼は、多種多様な作品を手掛け、それぞれの作品に、的確な解釈を施して行くが、私の作品となると、この、やや格式ばった解釈の中に、間の機微が光る。そして、私もいい気分になって傾聴する。私は一年早く還暦を通過したが、お互いにこれからまた、一仕事だ。